シリーズ多文化教育実践　第２回

ザンジバルにおけるフィールドワーク指導コーチングフェローによる指導実践の報告

長崎大学　阿部　　哲
長崎大学　寺野　梨香
早稲田大学　牛久　晴香

１．「海外フィールドワーク実習」の年間スケジュール

ここではまず、「海外フィールドワーク実習」の一年間の流れをふりかえる。本実習は集中講義として開講されたが、この表からわかるように、実際には年間をとおして準備や成果のとりまとめのためのセミナーや催しがおこなわれた。平成28年度と29年度における実習の進め方はおおよそ共通しているが、平成28年度の一年間の流れの概要は表１にあるとおりである。

まず、履修登録期間に入る前の４月上旬に、履修ガイダンスを実施した。ガイダンスでは、この授業の概要と１年間のスケジュールを説明し、実習にかかる経費と渡航日程の見通しを伝えた。

調査に関する準備を本格的に開始したのは、渡航のおよそ３か月前（履修ガイダンスの１か月後）である。各人の興味を自由に発表する「調査企画書[1]発表会」を開催した。平成28年度の受講者９名のうち４名は「医療実践」、５名は「社会経済」に関心があることがわかったため、学生をふたつの班に分けてセミナーを実施することを決めた。科目責任者の増田の指導のもと、医療実践班は阿部、社会経済班は牛久がそれぞれを担当するコーチングフェロー（以下、CF とする）として、学生の研究計画書の立案と文献調査のサポートをおこなうことになった。平成29年度も学生の関心に応じて、８名の受講者[2]を４名ずつ「文化・民族」班と「農業・流通」班へ振り分けた。科目責任者である増田の指導のもと、前者の

[1] この段階では、学生の自由な発想を妨げないようにするため「自分企画書」と呼んでいた。
[2] 平成29年度の参加者は正規の履修者７名のほか、非履修ではあるが参加を強く希望した学生２名の、合わせて９名であった。このうち、前期期間中に留学に出ていた学生１名を除く８名が準備セミナーに参加していた。

準備セミナーを阿部が、後者のそれを寺野が受け持つことが決定され、学生の研究計画書の企画補助に携わった。

上記の班分けにしたがって、６月末から準備セミナーがはじまった。準備セミナーは、調査企画書を研究計画書に仕上げていくことを具体的な目標として、８月まで実施された。このセミナーの最大の目的は、計画書を書きあげる過程で、ザンジバルについてはじめて学ぶ学生が、現地で調査を開始するために必要な知識やスキルを身につけられるようにすることであった。その成果は、８月初旬に開催された合同発表会で披露された。

８月の合同発表会の際には、渡航直前ガイダンスを併せて開催した。このガイダンスは、旅程や持ち物、費用などを確認したほか、はじめてアフリカに渡航する学生たちの不安や心配事を聞き、解消する場としての役割を果たしている。

ザンジバルでの実習は、夏季休業期間中に約１か月弱を費やしておこなわれた。

後期に実施したのはポストフィールドワーク・セミナーである。このセミナーは、研究成果報告書の完成および成果発表会の実施を到達目標として掲げ、週に１コマ、計３か月間にわたって実施された。その過程で、データの整理・分析、研究テーマの明確化、学術的な論証の方法を学生が習得できるようになることをめざした。その成果を２月中旬の研究成果報告会で発表し、多文化社会学部の教員や学生からフィードバックをいただいた。そうした活動の集大成として３月に報告書を刊行した。

ここまで、かけ足で本実習の１年間の流れをふりかえった。イベントが盛りだくさんな科目であったが、やはり本科目の核心は計５か月間おこなわれたセミナーとザンジバルでの実習であろう。以下、２では平成28年度の、３では平成29年度の実施プロセスを振り返りながら学生の研究を身近なところでサポートしてきたCFからの個別報告を行い、彼らの学び・体験の軌跡やCFのサポートの実践を詳しく紹介する[3]。

[3] この論考の一部は、平成28年度に刊行した『ザンジバルに学ぶ多文化社会の生き方』（阿部哲・牛久晴香編、長崎大学多文化社会学部、2017）に掲載された複数の章を改稿したものである。執筆者のうち牛久は平成28年（2016）度に、寺野は平成29年（2017）度にこの実習にコーチングフェローとして参画した。阿部は準備段階の平成27（2015）年度の現地視察にも参加している。

開催日	概要
4月5日	**海外フィールドワーク実習履修ガイダンス**
5月9日	**ランチセミナー**
5月27日	**調査企画書発表会**
6月24日〜7月29日	**準備セミナー**
6月下旬〜7月上旬（第1、2回）	調査対象の明確化、情報の収集
7月中旬（第3、4回）	調査目的の明確化、企画書の改訂
7月下旬〜8月初旬（第5、6回）	調査方法・項目の検討、企画書の完成
8月10日	**研究計画合同発表会と渡航直前ガイダンス**
8月27日〜9月21日	**調査実習**
11月1日〜11月14日	**写真展・ギャラリートーク**
10月31日〜1月31日	**ポストフィールドワークセミナー**
11月上旬〜11月中旬（第1〜3回）	フィールドノートの整理・清書
11月下旬〜12月中旬（第4〜6回）	テーマの再設定
12月下旬（第7、8回）	アウトラインの作成、再構造化
12月末〜1月下旬（第9〜12回）	原稿の執筆とピアレビュー
2月14日	**海外フィールドワーク実習研究成果報告会**

表1　海外フィールドワーク実習に関わるセミナー・発表会一覧

2．第一期（平成28年度）のフィールドワーク指導

2．1．「伝統医療班」の活動

2．1．1．準備段階

平成28年度の参加者のうち、「伝統医療班」に属する学生4名の指導は、主として阿部が担当した。準備セミナーの実施期間は、ザンジバルについて初めて学ぶ学生を指導し、3か月後に現地調査を開始できるのに充分な知識やスキルを身につけてもらうための準備期間と位置づけた。

この段階で重要な要件は、調査テーマの選定とともに、学生たちのザンジバルに関する「基礎情報」を蓄積することである。本科目の履修者のうち、授業開講時に、ザンジバルひろくはタンザニアについて何等かの知識を持ち合わせていた学生の数は限られていた。この点において、学生間での基礎情報の共有は、対象地域の文化・歴史・経済などの特徴を概観し、調査テーマを選定していくうえで不可欠である。例えば、ある学生は、「生活に組み込まれた呪術」に興味を示していたが、準備セミナーではこのテーマについて現地調査を行う上でどのような情報が役立ち、必要となるのかを学生が意識することが重要であった。この学生には、ザンジバルにおける「呪術」、「使用言語」、「経済変遷」に関する基礎情報を調べてもらい、調査テーマに厚みを持たせる工夫を試みた。

その他、各学生が選定したテーマを鑑みて、ザンジバルにおける「イスラーム信仰実践」、「歴史概観」、「社会制度」、「流行病」、「現代政治」などについて、文献調査から得られた基礎情報を持ち寄った。これらの情報共有に加え、文献調査段階での精読やセミナーでの議論を通じて、かれらに新たな問題意識を啓発する二次的効果も見られた。

この「基礎情報交換」セミナーを２週にわたって行った後、各学生による調査企画の発表の機会（１回あたり２人、４回のセミナーで各学生が２回の発表機会）を持った。その際、CF の立場から強調したのは、調査によって「明らかにしたいこと」を意識することである。準備セミナーの初期段階では、授業中に「この調査を通して何を明らかにしたいのか」というシンプルな問いを発しても、多くの学生は答えを濁し、問題意識の整理がついていない様子が見られた。このような事情もあり、この「問い」を意識させながら、学生たちの調査テーマをさらに絞っていく狙いがあった。

また、セミナー中の限られた時間ではあるが、発表者に発言権を一任することにより、学生に責任感を持って授業へ臨んでもらい、企画発表を通して教員―学生間で活発な議論を深めてゆくための場とも位置づけた。CF は、セミナー中は主に司会進行役を務め、学生の声をできる限り拾い上げ、クラス全体の議論の中で彼らの自主性・創造性が発揮できるよう配慮した。これらのセミナーでは、緊張感に満ちながらも自由な雰囲気の中で、聴衆から発表に対するフィードバックが共有され、発表者は次の発表に向けた貴重な示唆を得た。

各学生の２度に渡る調査企画発表ののち、社会経済班（５名）と合同で研究計画報告会および渡航直前ガイダンスが開催された。準備セミナー始動から３か月を経たこの時点で、受講者９名の学生は、程度の差は見られたものの、各々調査課題の設定がなされていた印象を受けた。彼らがザンジバルで調査を開始するに

あたり、現地でどこに赴いて、誰にインタビューし、何を見聞きしようとしているのかについて、準備セミナーを通して問題意識の整理が進んだのであろう。

準備セミナー期間の学生指導において、個人的に苦労したことは、学生の文献選択が日本語文献に偏っていたことである。ザンジバルに関する日本語文献はいくつかあるものの、フィールド調査にもとづいて執筆された文献の数は限られていた。学生が調査企画を改訂していく過程で、同一の著者が引用され、観点の多様性という点においてはバラエティを欠いていたといえる。このことは、調査テーマの選択肢を限定する要因となりえた。この状況を変えるべく、阿部は折を見て日本語文献とともに英語文献を学生へ提示し、彼らがザンジバル社会・文化を多角的に考えたり、調査企画に厚みを加えたりできるようアドバイスを行った。

2．1．2．ザンジバルでのフィールド調査

現地調査において、阿部は学生の調査に何度も同行した。この調査に伴い、タンザニア公立大学より、調査テーマごとに分かれた各グループに対して１人ないし２人のアタッチト・パートナー（attached　partner、以下 AP）が紹介された。調査中は、彼らがスワヒリ語を英語に通訳し、学生は彼らと英語でコミュニケーションをはかった。調査開始当初は、学生は英語をしばらく話していなかったせいか、些細な会話内容についてその都度阿部へ確認を求め、インフォーマントへの話し声は小さく、幾分自信なさげに話しているように見えた。しかし、３日と経たないうちに彼らは対話を含んだフィールド調査に慣れてきて、ノートを取りながら自発的に質問するまでになっていた。阿部への英語に関する質問は、専門知識を必要とする会話のみへと次第に限られていった。

学生たちは通常、朝９時に大学付属図書館で AP と待ち合わせ、打ち合わせの後、調査地へ赴いた。ストーンタウン内の調査地へは徒歩で出かけたが、日によってはミニバスを利用して、関連施設・機関を訪れてインタビューや参与観察調査を実施した。英語と同様に、学生は新しい環境で素早く適応力を発揮して、ミニバス内でも居合わせた乗客と自然と挨拶や簡単な会話をかわすまでになり、時にはそこで調査に関する有益な情報を得ることもあった。

この変化は、彼らの調査体制にもみられた。最初の一週間は基本的に全員行動をとっていたが、その後は各々の興味に応じて、時に、２つのグループに分かれて行動するようになった。滞在期間の後半部は、阿部はグループ間あるいは学生間のコーディネーター役として、AP と学生との連携を図りながら、彼らの調査の一翼を担った。

学生が調査を実施するにあたり、必要に応じて、阿部は自身のフィールド調査

経験をもとに調査のポイントを学生と共有した。ときに学生たちはインタビューのさいに会話の内容を記録することにのみ集中してしまうことがある。そうした際には、インフォーマントの表情や振る舞い、話しぶりなどからも有益な情報が得られるものがあるかもしれないとアドバイスを行う必要がある。また、ある学生は、インフォーマントにたいして同じ質問を繰り返したものの、なかなか意図した回答が得られなかった。そのような、直接的に回答が得られない場合には、工夫して誘導的な質問を臨機応変に投げかけながら回答を得ていくことの大切さを伝える必要もある。現場でアドバイスを行うタイミングがなかったときは、その時の状況をメモで書き残して、機会をみて彼らにそれらのアドバイスを共有した。

ザンジバル滞在期間中、夕食後には全員で集まっての「ミニ報告会」を開催した。これは、個人あるいはグループによる発表形式で、その日に調査したこと、発見、反省、翌日以降の計画について情報共有を行う場である。各学生は各々の調査計画にもとづいてピンポイントで調査を進めており、興味深く彼らの話に耳を傾けた。多くの学生が当初の調査企画と現実のデータとの齟齬に悩んでいたことは印象深い。当初の計画通りに調査が進んだ学生はわずかで、現場で得られたデータをどのように大きな調査枠組みへと組み込んでいくかについて苦心している様子であった。

各学生によるミニ発表の後は、全員でオープン・ディスカッションを行い、それぞれの発表に対して活発な意見交換がなされた。学生が調査企画と現実との間で揺れていることに対して、阿部は調査の継続性の大切さを強調した。目新しい、予期しなかったデータは、選定した調査テーマを違った角度から見つめるための大切な素材で、当面は必要と思われないようなデータとも積極的に向き合う必要がある。また、自身の調査経験から、フィールドワーク中に生じた感覚、思いや考え方あるいは画像・映像は、後にデータ分析していく上で役立つ可能性がある。ミニ報告会で挙げられたこうしたフィードバックを学生は真剣に聞き入り、それらを反映しながら調査計画の練り直しを行っていた。

フィールドワークに同行するなかで難しさを感じたのは言語の問題である。ザンジバルの人々は母語であるスワヒリ語で日常生活を過ごしている。AP に通訳として入ってもらったが、言語間に存在する概念のニュアンスの違いが対話の随所に現れ、会話の流れを左右していた。例えば、AP が通訳を行う過程で言語間のニュアンスの違いの説明に時間を費やしすぎて、時には、「本題」であるはずの質問に対する回答が後回しにされたこともある。また、これらの一連の会話のやりとり（学生―通訳者―インフォーマント）は、インフォーマントと聞き手の

会話の流れを途切れさせてしまうことがあり、インフォーマントの回答の仕方や内容、あるいは会話の流れのあり方に影響を与えたかもしれない。

2．1．3．ポストフィールドワーク・セミナー

ポスト・フィールドワーク期間は、フィールド調査で得られたデータを再考・整理して、学生の執筆テーマの明確化をはかり、最終レポートの完成へ至る期間と位置づけられる。ポストフィールドワーク・セミナーは、フィールド調査を終えて、約１ヶ月後の10月下旬に開始された。

このセミナーでのCFの役割は、学生の最終レポート作成に向けてファシリテーターとして彼らの指導にあたることであった。最初に取り組んだのはフィールドノーツの清書作業である。この作業の狙いは、学生のザンジバル滞在の記憶・記録をブラッシュアップし、思い出、感覚、調査アイデアを洗い出すことを目的とした。この作業過程では、清書作業中によみがえってくる調査当時の様子や、その時点で思い浮かぶことを何でもメモするように伝えた。とくに、調査テーマについて、フィールド上で当時の自分が考えていたことと清書時の自分の考えとの間で、自身の見解や捉え方がどのように変化したのかについて留意することは重要である。フィールド調査前のテーマ選定は、主に文献を通してなされたが、ポストフィールドワーク・セミナーでは、ザンジバルで得られた調査データに比重をおいて、執筆テーマを練り直す手法をとった。言い換えれば、データに即したテーマの再選定である。

この清書作業を通した調査データの再考・整理は、学生がデータの重層性や奥深さを認識する上で有効であり、このことは各学生の執筆テーマの選定にも役立つ。セミナーでは、同一のデータについて、学生間で異なった見解が共有され、その違いや理由について活発な議論へと展開した。次に、清書の過程で明らかになってきたこと、また、そこから発展できそうなテーマを各自２つ、３つ持ち寄ってもらった。ここでも、学生間で活発な討議がなされ、各々がフィールドで見聞きしたことにもとづいて、さまざまなテーマが提案された。フィールド調査前のテーマとここで持ち寄られたテーマを比べると、後者のほうが具体性に富み、データにもとづいて作成されていることは明白である。またこの過程で、インフォーマントやデータを多く共有しているという理由から、伝統医療班の４人が共同で一つの論文を作成することで同意がなされた。

12月下旬からは、最終レポートのアウトライン作成および執筆作業に取り組んだ。ここでとりわけ阿部が指導に際し留意した点は、論理的一貫性と論拠の示し方である。学生がアウトラインを構成するにあたり、阿部は、ザンジバルについ

ての背景知識を持たない聴衆を想定して、彼らにザンジバルでの現地調査のことを論理的でわかりやすく説明するつもりで作業することを求めた。CF として、学生に必要とされればいつでも助けに入るつもりでいたが、驚くことに、学生たちは即座に白板を使い、KJ 法を駆使しながらアウトラインの構成作業を自発的に開始した。その作業を通じてこれまでのセミナーで共有されたデータやその解釈へ立ち返りながら、一時間弱でレポートのアウトラインを見事に完成させたのである。長崎大学で一年次から開始したアクティブ・ラーニングによる学びの効果が発揮され、阿部の発言の機会は最小限で済んでしまった。

一方で、報告書の執筆に関して、学生の論拠の示し方には課題が見受けられた。多くの学生の間で、十分な証拠を提示せずに論点を一般化する傾向が見られたのである。例えば、一人のインフォーマントによる発言であるにもかかわらず、それがあたかもザンジバル社会全体について当てはまるかのように記述し、論点の結論へと急いでいくケースが見られた。また、論拠を提示する際は、文献あるいはインフォーマントによる発言が中心で、現地調査で得られた他のマテリアルを十分に生かし切れていない印象を受けた。これを受けて、阿部は、論点を無暗に一般化せずに、インフォーマントの発言を引用する際には、それは誰による発言で、その人はどのような背景を持つのか明示し、また、それらの発言をザンジバルの歴史文化的文脈を考慮しながら、限定的に記述するよう指摘した。論拠の「薄さ」については、フィールドワーク中に体験したことや観察していたことを思い出して、それらに加筆すれば、より「分厚い」論拠になってくるはずである。ある学生は、調査の移動途中のエピソードを論拠として加え、民族誌的要素を含んだ報告書を作成するなどの向上が見られた。

2．2．「社会経済班」の活動

牛久が担当した平成28年度の社会経済班は、観光業と中古車輸入業を調査する５名の学生からなっていた。ここでは、彼らとともにつくりあげてきたセミナーと実習を、企画兼取りまとめ役の視点からふりかえってみたい。

2．2．1．準備セミナー

準備セミナーは、ザンジバルで実施する調査の問題意識を明確にすること、そして調査中にたちあらわれる事象を理解するために必要な知識を蓄えることをめざしておこなわれた。そのため、基礎情報の収集、調査課題の明確化、調査方法の選定と、回を追うごとに調査計画書が完成していくことをイメージしてセミナーを構成した。

まず、「基礎情報の収集」の段階では、ザンジバルの歴史、経済、社会に関する基礎的な情報の収集をおこなった。これは、調査課題をより広い社会経済的背景に位置づけることを目的とした試みである。社会経済班には前年度から研究計画を練ってきた学生が複数名いたが、調査の対象や目的が明確なだけに、ザンジバル社会そのものへの関心も喚起したいと考えたのである。

各学生が調べる基礎情報の内容は牛久が設定し、学生の調査対象に関連しながら、より一般的なザンジバル社会の理解につながるようなトピックを選定した。たとえば眞鍋愛には、ストーンタウンが世界遺産に認定される決め手となった、「アフリカ、アラブ、インド、ヨーロッパ文化の複合的な影響」について理解を深めるため、ザンジバルの支配体制の変遷を調べる課題を出した。そのほか、観光客の推移、経済自由化にいたる政策の変遷、ザンジバルの言語状況、スパイス生産の歴史といった背景的な知識や統計などの客観的資料の収集を課題とした。

学生はしっかり情報を収集し、わかりやすくレジュメをまとめてきた。また、セミナーでは学生が自分で調べたことや他の授業で学んだ知識を自発的に交換し合っていた。これは、一年次からのフィールドワーク・モジュールの授業をはじめ、普段から調べ学習やグループワークになじんでいる多文化生の能力が発揮されたものだと理解している。このプロセスを経たことで、学生は自身の調査対象を超えたザンジバルの歴史や社会経済の動態についての理解を深め、そこから問題関心を派生させ、調査内容を充実させることができた。

「調査課題の明確化」、「調査方法の選定」の段階では、企画書を研究計画書のレベルにひきあげることをめざした。企画書を加筆修正するかたちで毎週課題をだし、セミナーは課題のピアレビューをおこなう時間とした。ピアレビューでは、牛久が進行役をつとめ、学生が自由闊達に議論を交わせるよう配慮した。おおまかに社会経済や産業に関連するトピックであったとはいえ、彼らはツアーガイド、スパイスツアー、土産物画家、ストーンタウン、中古車輸入業者と、重複しながらも異なる対象に関心をもっていた。しかし、社会経済班の５名は、他者と意見を交換し合い、そこから何かを拾うことにとくに長けていたように思う。自身の調査内容にひきつけ、他の学生の悩みを理解しながら、「自分であればこうしたことを調べてみる」という言い方で、やわらかく助言をしていたことが印象的であった。４回の発表とピアレビューを経てのぞんだ合同発表会では、研究計画は見違えるほどしっかりしたものになっていた。

この段階で牛久がとくに意識したのは、学生が実際の調査を具体的にイメージできるようにコメントをすることだった。とくに「調査方法の選定」の初期の段階では、「〇〇をどう思いますか」といったように、質問の内容が抽象的にすぎ

たり、「△△を調べる」のように、具体的に何をするのかわからない書き方だったりすることが多い。そのため、質問の際には、ここで聞きたいことは何なのか、何を対象にどのように調べるのかなど、いわゆる「５Ｗ１Ｈ」を意識させるような尋ね方を心がけた。完成した研究計画書では、かなり具体化された調査項目を設定することができた。

牛久の本心としては、学生にはあまり「調査」にとらわれず、自由にフィールドを楽しんでもらいたいという気持ちもあった。しかし、ザンジバルでの滞在期間は３週間と限られていたし、この滞在を単なる社会見学に終わらせないためにも、調査の仕方がわからず途方にくれてしまう状況を回避する必要があったのである。

２．２．２．ザンジバルでの実習

社会経済班の場合、ザンジバル滞在中は各学生が個別に調査に出かけた。広義の観光業をトピックとした４名が行動を共にすることも時にはあったが、それぞれの調査目的や手法は大きく異なっていたので、おのずと独立して調査をおこなうことになったのである。言葉が十分に通じない異国の地で、ひとりで調査に臨むには不安もあっただろうが、牛久の目には学生はそれなりにのびのびと調査しているように映った。そのため、牛久はフィールドワークのようすや進捗を把握するために、それぞれの調査には数回ずつ同行するにとどめた。

ある程度放任した甲斐もあって、学生はそれぞれ自由な発想で調査を進め、興味深い知見をもち帰ってきた。たとえば牧夕莉子は、「シティツアーやぶり」を敢行し、普通の観光客として複数の観光ガイドにストーンタウンを案内してもらった。その過程で、彼らの説明がちぐはぐだったり、矛盾していたりすることに気づき、「多様な文化」ということばがブラックボックスになっていることを感じとっていった。また、清田千尋は今回の受講生のなかで唯一村に住み込むことを選んだ。村での滞在には牛久も同行したが、彼女は牛久にくっついて歩くことなく、自発的に村人に話を聞きにいった。朝から夜までツアーガイドや村人と話をする過程で、スパイスツアーを運営する人びとの特性や、ガイドにとってのスパイス農園の位置づけに気づいたのだった。ひとりで調査することで、彼らは現地の人とふれあうことの楽しさや、調査を進めることの難しさ、そして自分の手で新しいことを発見するときのわくわく感を実感することができたことだろう。

このように、学生はたくましくフィールドワークをおこなっていたので、牛久はそれを陰からサポートすることに専念した。彼らは、ほうっておいても翌日にすることを決められるだけの行動力をもっていた。そのため、牛久は調査の目的

やみるべきポイントを意識化できるように声をかけることを心がけた。たとえば、調査をはじめて間もないころは、AP が翌日の調査地を提案していた。AP は学生の関心をくみとったよい提案をしてくれたが、その提案にしたがうことについて学生本人が何のために、何を見に行くのかを説明できないこともあった。そのため、夜のうちになるべく丁寧に学生に話を聞き、翌日の調査を具体的に思い浮かべられるように助言した。あらかじめ定めた「調査対象」に話を聞くだけでなく、なんでも見て、聞いて、体験してみることがフィールドワークの醍醐味であることを伝えようと試みた。

牛久個人の試み以上に、学生が調査を進めるにあたってとくに重要な役割を果たしたと考えられるのは、夕食後の調査報告・情報共有の時間である。この実習の唯一のルールは、「夕食は全員一緒に食べること」だった。夕食の後片づけを終えたら、そのまま居間でその日の調査の成果を報告した。報告時間は５分程度で、お酒を軽く飲みながらのくつろいだ雰囲気ではあったが、聴衆は10人以上で、みな集中して話を聞いているし、質問もされる。この報告の時間が念頭にあるので、学生はたとえ調査で疲れて帰ってきても、必ずその日の発見を整理した。とくに単独行動が多かった社会経済班の学生にとって、この作業は自分の見聞や経験を人に伝わるように、かつ筋道だって説明する訓練になったと思うし、翌日の調査でやるべきことを明確にするうえでも大きな意義があったと考えている。

２．２．３．ポストフィールドワーク・セミナー

前述のとおり、ポストフィールドワーク・セミナーは、実習の成果を学術的にまとめることをめざし、12回にわたって開催された。学生の体験や感覚をみずみずしいままに文章化することが重要という教員と CF の共通認識のもと、帰国して１ヶ月ほど経過した段階でセミナーを開始することになった。

フィールドワーカーのご多分にもれず、社会経済班は全員が当初思い描いていた計画とは異なる調査を実施して帰国した。当初の関心にひっぱられて、データの解釈に影響が出ることを避けるために、セミナーではまず、調査前に書いた計画書は一度忘れて、フィールドノートを整理し、データをまとめ、そこから言えることを探す作業に集中した。６コマを費やし、学生がある程度データを出しきったあと、問題意識や研究目的を練り直し、報告書の執筆作業に進むという構成でセミナーを進めた。報告書の執筆にとりかかった12月以降は、毎週執筆の目標を設定し、前日の夜までに班の全員に原稿をメールで送ることにした。これは、セミナー中のピアレビューを充実させるための試みであった。

社会経済班のセミナーは、医療実践班とは大分異なるかたちで進行した。医療

実践班は、４名で１つのレポートを書くことになったこともあり、セミナー中は学生同士の相談・議論が中心で、CF の助言は最小限に留まったようである。しかし、社会経済班のセミナーはそれぞれの学生と教員・CF のあいだのインタラクションが中心となった。

誤解のないように付言すると、学生は他の学生の発表に対して積極的に質問していたし、コメントもしていた。データが足りないと焦る発表者には、ストーンタウンでの個人的な経験にもとづく率直な感想を述べて、発表者の着想をうながした。また、他の発表で気になったこと、たとえば先行研究のレビューの仕方や事例の書き方などを、自分の悩みと関連づけて質問していた。このことは、問題を全員が共有し、解決することにつながった。

しかし、学生の質問に最終的に答えるのは教員や CF だった。このような形態になったのは、学生の調査内容がばらばらだったことが大きい。セミナーの焦点が個別具体的な事例とその解釈にあたるにつれて、異なるトピックにとりくむ他の学生にコメントをしにくくなったものと考えられる。また、自身の原稿や他の授業の課題に忙殺され、他の学生の原稿を十分に読めなかった可能性もある。

学生同士の議論が限定的であった分、コメントの際には具体的な解決策を提案するだけでなく、他の学生にも共通するような抽象度で説明をくわえることを心がけた。学生はその意図を十分汲みとり、自省し、その成果を報告書に結実させていった。

ところで、社会経済班のフィールドワーク後の展開として、特筆すべきことがある。それは、日本での情報発信や調査の発展につながったことである。たとえば高田真也は、帰国後も日本で手に入るものを画材として利用し、ティンガティンガを描きつづけた。また、徳永翔太郎は来日したインフォーマント、アティム氏の中古車買付に同行し、日本でもフィールドワークを継続させている。徳永が日本で調査をおこなうことに成功したのは、ザンジバルでの協力者であったアティム氏としっかりと信頼関係を形成していたためであると考えられる。彼は自動車に関する豊富な知識を活かして、インフォーマントと真摯に向き合い、ザンジバルでの調査にとりくんだ。その結果が、日本での調査につながったのである。このことは、学生が足の向くまま、興味の赴くままに、行動できる自由を確保することの重要性を示している。教員や CF にできることは、学生の発見をともに面白がり、彼らの次の一手を後押しすることなのかもしれない。

3．第二期（平成29年度）のフィールドワーク指導

3．1．準備段階

平成29年度も前年と同様に、4月初旬に履修ガイダンスを開催した。このガイダンスでは、前年度の実績を示しながら受講生へ授業概要と実習のための必要経費、そして一年の流れについての説明を行った。前年度の履修者も数人、ガイダンスへ駆けつけて、学生目線から受講生へザンジバルでの調査体験や授業アドバイスなどを率直に語ってくれた。ただ、この時点で、受講者は確定しておらず、本格的な海外フィールドワーク実習の始動を見たのは受講者全員（8名）が会して行われた5月15日のミーティングである。ここで前出の「自分企画書」に関する説明がなされ、2週間後に各自の調査案を持ち合うことが確認された。

2週間後の6月冒頭に開催された調査企画書発表会で各学生は作成してきた調査企画の発表を行い、それらのテーマにより、平成29年度は阿部が「文化・民族」系の4名（梶原拓樹、永井優衣、羽田真紀代、宮城敬）を、また寺野が「農業・流通」系の4名（川床愛、川畑容、眞木直樹、吉岡真唯）を準備セミナーで担当することに決定した。以下では、8月の調査企画書発表会まで、週1回のペースで開催されたセミナーを通しての、各グループにおける学生の学びの過程をCFの立場から記述する。

3．1．1　準備セミナー（阿部担当班）

阿部が担当した学生は当初、ザンジバルにおける「服飾トレンド」「音楽文化」「相互扶助の実践」そして「観光産業」など、多岐にわたり斬新なテーマに関心を示した。昨年同様、受講生のザンジバルに関する知識は限定的であるため、阿部は彼らの今後の調査に有用と考えられる「背景知識」項目を選定し、最初の2回のセミナーで、学生が背景知識に関して発表、意見交換する機会を設けた。たとえば、梶原は相互扶助の実践についての文献調査を「アフリカ」という少々漠然とした枠組みから出発したものの、調査を進めるうちにイスラーム的な要素や他地域での先行研究を組み入れながら研究テーマの絞り込みをはかった。また、宮城は奴隷制時代（19世紀）や第一次世界大戦といった大きな文脈の中で衣装とアイデンティティの関係性を捉えて、現代ザンジバルにおける衣装研究についての見地を深めた。これらの作業は、彼らがより広範な視座から上述のテーマを捉え直せるという利点に加え、そのことはまた彼らのザンジバル社会についての新しい発見につながりえる。

続く4回のセミナーでは、背景知識のアップデートとともに、それらを基軸に

した調査企画書の目的と意義を明確化することにとくに重きを置いた。学生が調査企画書を洗練していく過程で苦労していたことの一つは、「フィールド調査を通して明らかにしたいこと」を見つけることである。現地での活動計画を立ててくるものの、そのことにより何が明らかにされ、また、いかなる学術的意義・貢献を有するのかについて尋ねられると、学生は言葉を濁す。その際の助言として、阿部は参考文献を活用する大切さを強調した。参考文献を通して、対象地域の社会文化について学べるのみならず、調査方法や調査対象者、そして結論までの問題意識の展開のしかたなど、調査計画書を企画していくうえで参考にできることが多くちりばめられている。永井は、日常的に音（楽）とともに生活する人々に焦点をあて、ザンジバル独自の音楽世界に興味を抱いた。永井が主たる参考文献として援用していた鶴見俊輔の「限界芸術」は、彼女が現地での調査目的や意義を整理していく上で助けとなったようで、このことは授業用レジュメからも読み取れる。羽田は、当初、写真を通してザンジバル文化について探求することを考えていたが、文化遺産としてのストーンタウンの保全について調査企画書を提出するに至った。その決め手となったのは、前年度の海外フィールドワーク実習受講者である眞鍋や牧の論文であり、これらの文献精読を通して、羽田の調査全体像は格段によくなった。

また、学生に調査目的と意義を意識づけるためにいくつかの試みをおこなった。たとえば、調査で明らかにしたいことを１分で簡潔かつ論理的に述べることを学生に想定してもらい、調査目的・意義という観点から自身の研究を再考する機会を提供した。実際には１分以上の時間を要したが、学生にとってこのような活動は彼らの思考の整理を促すことに加えて、彼らが調査目的や意義を明確化していくことを後押しする。短い時間枠内で自身の調査について説明するには、そのことを明晰に理解しておく必要があるためである。加えて、阿部は「現地調査計画表」を準備し、ザンジバルにおいてどこで何についてどのような手法を用いて調査を行い、何を明らかにしていけるのかを「計画表」へ学生に具体的に書き込んでもらった。この取り組みは、調査目的と意義を明瞭にしながら、現地での調査イメージを膨らませることを狙いとした試みであった。

学生は各々、辛抱強く調査企画書を練り直して、８月９日に開催された渡航ガイダンスを兼ねた合同企画書発表会に臨んだ。どの企画書も第一稿と比較して、調査目的や意義、そして調査計画の面で改善が見られ、彼らは現地で調査を開始できる状態になったと阿部は感じた。最終的に、梶原は「土産産業と現地人とのつながり」、永井は「ザンジバルにおける生活音楽」、羽田は「ストーンタウンの保全課題」、そして宮城は「民族衣装から見る文化変容」をテーマに掲げ、現地

調査を開始することとなった。

3.2.1　準備セミナー（寺野担当班）

寺野は本科目履修者のうち4名(吉岡、眞木、川畑および川床)が中心メンバーとなって開催された準備セミナーに携わった。準備セミナーが始まった5月中旬は、メンバーが提出した「自分企画書」をもとに興味関心のある事柄を発表する期間となり、各学生が持つ「食事」「海藻」「米」「食器」というキーワードが、テーマ選択への指針となった。当初、学生は自らが興味をもつキーワードに限って積極的に発言する傾向があったが、CFとして準備セミナーをファシリテートする過程では、各自が持つ関心分野が他メンバーのテーマとどう隣接するのか、その関連性を意識させるよう工夫をした。このことが、準備セミナーが各学生の発表や情報の共有の場として機能するだけでなく、自らの研究を広義の食と農に関する研究分野でどう位置づけられるのかを模索する機会となった。準備セミナー初期段階ではザンジバルの基礎情報の収集やキーワードに関連する文献調査が中心となり、準備セミナーの回が進むにつれ、4名の研究テーマが絞られ「生産」と「食」へとまとまった。準備セミナー終盤では、研究テーマと調査方法を明らかにし、インフォーマントへの質問項目を検討しながら調査計画を立て、ザンジバルでの現地調査に備えることができた。

「生産」と「食」という2つの大きな研究テーマから派生し、例えば、吉岡は生家が代々営んできた農業という生業からザンジバルの稲作に興味をもち、眞木は海藻産業から女性のエンパワーメントというテーマに注目するようになった。「生産」をテーマにした2名の学生は、歴史、生産構造や輸出入の現状に関心をもつことで、主食でありながら自給作物としてのみ生産される稲作と外貨獲得に貢献する海藻養殖という背景の異なる産業への理解を深めることができた。準備セミナーを通して、ザンジバル経済において両産業が持つ役割について意識することで、稲および海藻生産部門の何を明らかにしたいのか、誰がインフォーマントになりうるのかを考える機会をもつことができた。CFとして両者が設定した研究テーマへ接近できるよう、学生の学びが進むよう工夫し、文献調査やセミナー内での議論を通してテーマの方向性を共に模索した。

ザンジバル食文化に興味をもって「食」という研究テーマにたどり着いたのは川畑と川床である。両者は「食」という広義な共通のテーマを持ち、ザンジバルの食文化への興味を起点としながら、異なる対象にアプローチすることで過去と現在の食文化を明らかにしようと試みた。食事形態やその風景から現在のザンジバルの共食をみつめ、人々のつながりに興味を持った川床は、準備セミナーを通

してアフリカの食事風景に関する文献調査を行った。前年度にフィールドワークに参加した人々への聞き取り調査を行うなど、食に関する限られた情報を補えるよう工夫した。過去の食文化を食器や調理器具から考察する考現学という研究手法に興味を持った川畑は、徹底した文献調査を行った。川畑が準備セミナーを通して考古学や考現学的アプローチから食や食事方法（汁物をスプーンですくっていたのか否かなど）の変化を明らかにする難しさを痛感するなか、準備セミナーでの議論は現存する食器や海岸に漂着する欠片（かけら）そのものを対象に調査を行うと考えるようになった。両者の食文化の興味関心は準備セミナーを通して深まり、CF として準備セミナーを進行するなかでフィールドワークへの意欲を高めることができた。

3．2．ザンジバルでの実習

現地実習では、前年度と同様に、ザンジバル公立大学より派遣された AP が学生の調査テーマに応じて調査補助を担ってくれた。現地では学生は「文化遺産（Heritage）」、「農業（Agriculture）」、「文化（Culture）」の 3 グループに振り分けられ、各グループに AP 1 人または 2 人が調査補助にあたった。文化遺産グループには梶原、羽田、宮城が、農業グループには眞木、吉岡が、そして文化グループには川床、川畑と永井に加えて、「トビタテ！留学 JAPAN」[4]の留学プログラムの一環として実習に参画した中村優平が割り振られた。指導体制における昨年度との違いは、準備セミナーでは便宜的に「阿部班」と「寺野班」に分かれて授業が進められたが、学生の調査テーマが多岐にわたるため、この区分けを解体して、教員・CF が臨機応変に学生の実習指導にあたったことである。この調査テーマの多様性は、学生と AP による調査のあり方にも反映された。グループ分けはなされていたものの、実際には学生たちがグループ全体で調査をおこなうことは稀であった。彼らはグループの学生間で互いに調整を図りながら、各自が都合の良い調査日時を選定し、AP に調査へ同行してもらえるようアレンジをおこなっていた。

学生の調査に対する積極性に気づくのに、時間はかからなかった。海外調査において現地で話されている言語を習得することは、コミュニケーションの円滑化のツールとして必須であるが、多くの人類学者が民族誌調査を通して示してきた

[4]「トビタテ！留学 JAPAN」は文部科学省が支援する返済不要の留学奨学金プログラムで、日本国外での調査プロジェクトへの助成金援助を行っている。中村は同プログラムによってイギリスへの留学のあと、インドネシアでのインターンシップを経て、海外フィールドワーク実習チームに参加した。

ように、それを学ぶことは現地の人々が日常世界の中で何をどのように見聞きしその空間で生活しているのかを理解することにもつながる。梶原は時間を見つけてはスワヒリ語の研鑽に励み、習いたてのスワヒリ語で果敢に街を行き交う人びとと交流を図っていた。現地では、海外フィールドワーク実習一期生の高田を模範とし、現地の土産物画家へ弟子入りし、毎朝決まった時間に絵画スタジオへ出向いた。ザンジバルの一大土産物である「マサイ・ペインティング」を現地の人たちと同じ空間で描いてその実践感覚を研ぎ澄ましながら、ペインティングを介して展開されるザンジバル独自の人間世界に興味を抱いたようである。得意の絵画力にさらに磨きがかかりマサイ・ペインティングのノウハウを人に伝えられるまでになっただけでなく、梶原はストーンタウンの物産店を訪ね歩きながら、ザンジバルにおけるペインティングの歴史、ネットワーク、さらにはその生産・販売の現状にも精通するようになった。

フィールド現場における人々との結びつきを現場力と表現するならば、川床はその力を存分にザンジバルで発揮していた。先述の言語習得に加えて、人類学者の間で「ラポール」と呼ばれる、メタ言語レベルでの人間同士の信頼関係を構築していくことはフィールド調査における大切な要素である。川床はストーンタウンの一角に住む家族（オマール・イッサ家）と知り合いになり、現地人の食事事情を調査するため、毎日のように通い、一緒に昼食の支度に参加すること、すなわち参与観察をおこなった。文化グループに振り分けられたものの、彼女はAPのアシストをとくに必要とするわけでもなく、英語とスワヒリ語、そして現場力を駆使して調査を進めていた。毎晩の「夜のセミナー」時には驚くほど詳細な食事とそれに関わる人たちに関する記述がイラスト付きでまとめられており、彼女のフィールドワーカーとしてのポテンシャルの高さを感じずにはいられなかった。川床は、一般的に「乏しい」と考えられがちなアフリカの食事事情に対して現地で疑問を呈して調査を開始したわけだが、オマール・イッサ家での粘り強い参与観察を通して、彼らの食生活そしてそれを取り巻く人間模様から見えてきた「豊かな」食文化を描き出すことに成功したと言える。

実習前に立てた調査計画が、フィールド実習において計画通りに進むことは稀である。実際に、平成28年度の第一期生たちは推敲を重ねてきた調査計画書を片手に現地調査を始めたものの、調査の過程で新たな展開に出くわして、実習生全員が当初の計画とは異なった調査をおこなった。準備セミナーあるいは夜のセミナーでこの点について阿部が言及した際には、「自分の調査枠組みをできるだけ広く設定しておき、フィールドでの新しい発見と向き合えるよう、柔軟に研究計画を準備すること」をアドバイスした。いざ異国のフィールドで計画通りに調査

が進まなければ戸惑いが生じるのも無理はない。しかし、みな戸惑いながらも臨機応変に対応していった。たとえば、宮城は「マサイ民族」という調査枠組みに依拠しながら、フィールドでの発見をきっかけに新しい調査テーマの着想を得た。当初、マサイの民族衣装とその文化的影響力についての調査を進めていた宮城であったが、ストーンタウンで露店を営むマサイへのインタビュー調査から、「出稼ぎマサイ」が形成するコミュニティを見出し、実習中に研究調査を後者へシフトした。調査にあたり、彼は戸惑いを見せるどころか、持ち前の行動力を発揮して大胆に調査を進めた。時には、インタビュー調査のために数キロ離れた空港へ一人で出向いた。時に、納得がいくまで２時間以上も露店でマサイ青年と話し込んでその内容を熱心にノートへ書き記していた。しかし、大胆なこれらの調査活動は周到な調査計画に裏づけされており、宮城の調査に対する柔軟性とそれまで培ってきた調査企画力が実習中もぶれることなく根づいていることが垣間見えた。

現地でインタビュー調査を実施する際にインフォーマントとの信頼関係を構築できるかどうかは、質的調査の手法の一つであるインタビューの質に大きな影響を与えることがある。イスラーム学校という宗教教育の現場（マドラサ）において調査を予定していた中村は、イスラーム教の指導者として厳格な教員や生徒との信頼関係を積極的に築こうと試み、幅広い年齢層の生徒が集うマドラサで、参与観察を行った。生徒や教師とクルアーンを学び授業や口述試験を通して一体感をもつことで、インフォーマントに接近することができた。また片言の英語が話せるインフォーマントを探し出すことで、AP の通訳に全面的に頼るインタビュー方法から単独でのインタビューが可能になった。学校関係者にインタビューを試みる際には緊張がみられたため、インタビュー調査を開始した初期のころには寺野がインタビューをサポートする必要があったが、その緊張は回数を重ねるごとにほぐれていき、中村のインタビュー内容は充実していった。

調査に出かけていく学生とインフォーマントとの出会いは、学生のトピックやフィールドによってさまざまである。とくに「農業班」の場合、インタビューは約束を取り付けて訪ねていくものではなく、道端や畑、海岸で出会う人々に出会って話し込むという状況になることが圧倒的に多かった。吉岡と眞木は、それぞれのフィールドを訪ねるなか、農道や海岸で突然始まる会話に戸惑いを隠せず、インタビューをどう切り出すのかタイミングを計りかねることがあった。聞きたいことと相手が話したいことが食い違った際は、寺野が彼らの会話に介入することで軌道修正をする必要があった。しかし、毎日のようにフィールドを訪ねるなかで繰り返される突然のインフォーマントとの出会いは、彼らにインタビュー調査の瞬発力を身に着けされる良い機会となった。栽培・加工団体や農業試験場を見

学する機会にめぐまれ、複数のインフォーマントのあいだを飛び交う情報を整理しながら、話を聞くという難しい局面でも、臆せずインタビューを続けることができたのは、彼らが積極的にフィールドにでて現地での出会いを大切にしながら数多くのインタビュー経験を積み重ねたからではないだろうか。

フィールドワークは一人でできるものではなく、AP や CF と進めるだけでもない。多くの場面で頼りになるのは現地で作り上げるインフォーマントとのネットワークではないだろうか。ザンジバルの日常を映す音（楽）に興味を持っていた永井は、ザンジバルでのフィールドワーク開始後、さまざまな音（楽）を知るために、人が集まる音楽のある場所を探し求め、音楽に関わる人々と交流を重ねた。ザンジバルらしい音楽を探し求める永井のインフォーマントとなったのは、音楽家の集う演奏会やザンジバル音楽院の演奏家たちであった。聞きなれない楽器名や音楽用語が用いられることが多く用語の理解に苦心していたが、彼女は日々、友人を訪ね情報整理を進めた。永井は複数の音楽家にインタビュー調査を実施していくなかで、その中核となる女性音楽家の存在を知り、彼女のライフヒストリーをじっくりと聞き取ることでザンジバル音楽の解題につなげようと試みた。CF と永井が実施した数日間にわたる長いインタビューでは、音楽の専門用語がちりばめられていたが、友人から得ていた彼女の知識の蓄積がその理解を助けていた。

3．3．ポストフィールドワーク・セミナー

準備セミナー、ザンジバルでのフィールドワークを経て、帰国後にはポストフィールドワーク・セミナーが始まった。準備セミナーがフィールドワーク調査の準備期間であるのに対し、ポストフィールドワーク・セミナーはフィールドでの調査で収集したデータを整理しながら、ザンジバルで毎晩行われた「夜のセミナー」の議論を踏まえ、各自のテーマに沿って考察をする期間である。準備セミナーの開始時に学生は２つの班（阿部班・寺野班）に分けられたが、ザンジバルでのフィールドワーク実施期間に調査内容の変化にともない３つの班「文化遺産（Heritage）」、「農業（Agriculture）」、「文化（Culture）」に再度、班分けが行われたことを踏まえ、ポストフィールドワーク・セミナーでは、全員が週２回、月曜日と金曜日に行われる授業に自由に参加できる形式が取られた。ポストフィールドワーク・セミナーでは週に１回、すべての学生の発表が行われ、中心となる執筆テーマについて学生間で議論が交わされた。

ポスト・フィールドワークは10月中旬から開始されたが、開始当初は調査を通して収集されたデータ内容や調査結果を発表するというよりも、現地でまとめた

各自のフィールドノートをどう見直し、整理していくかを考える期間となった。各学生はさまざまなテーマのもとで情報収集およびインフォーマントへの接近を試みてきたため、ノートに書き留めた情報をベースに、フィールドワークを通して学生が感じたことや現地の様子、ノートに整理しきれていない情報などをまとめ、清書をして報告書の執筆に備える必要があった。各自がザンジバルでのフィールドワークを通して日本へ持ち帰ったものを再構築し執筆テーマと収集した情報を照らし合わせながら、データを整理した。ポストフィールドワーク・セミナーが始まった時点では、３週間の間にザンジバルで得た膨大な情報を前に学生たちが途方に暮れる場面もあったが、ノート整理が進まない学生を励ましながら執筆テーマに向かってセミナーの回を重ねた。ザンジバルの音楽家やマサイ人へインタビュー調査を中心に行った学生と、家庭での調理プロセスやマサイ・ペインティングなど人々が継承する技術に着目した学生とでは、そもそも執筆テーマへの接近方法やデータの種類が異なっており、フィールドノートを清書する過程では各学生がテーマに沿ったデータ整理の工夫が求められた。11月中旬に差し掛かると、授業で展開される学生間の議論は、次第に清書したフィールドノートのどの部分が執筆テーマを支える論拠になり得るのかというテーマとデータの整合性に移っていった。この頃のセミナーでは、各学生の執筆テーマに対する姿勢に変化が表れ、学生が教員やCFに執筆に関する疑問や不安を解消してもらうという一方的な指導の方向ではなく、学生が積極的にお互いの進捗状況を報告し合い、コメントを交換するようになっていた。１月上旬から学生は報告書の執筆に向けてアウトラインを設定し、フィールドワークで得られた情報や調査結果を理論的に組み立てる作業に取り組んだ。文化人類学、社会学、農学さらには食文化論など複数の学術分野を横断する学生の執筆テーマは更なる文献調査が必要になる場合が大半で、CFはデータの示し方や論拠の一貫性など、レポート作成に向けてより学術的なコメントを求められるようになった。

ポストフィールドワークの期間中には、「ポスターセッション」（2017年10～11月）や「写真展＆ギャラリートーク」（12月）が海外フィールドワーク実習の関連行事として開催された。10月上旬に開催された「ポスターセッション」は新しい試みとして多文化社会学部の学生に成果を紹介することを目的とした。各学生はザンジバルでのテーマとフィールドワーク調査の様子を写真と共に紹介するために１枚ずつポスターを作成し、共有スペースである多文化ラウンジにそれらのポスターを張りだした。加えて、ポスターに対する学生からの質問にカジュアルな形式で答えようとする試みとして、２週間に及ぶギャラリートークを毎日、昼食時に開催した。海外フィールドワーク実習に興味を持つ多文化社会学部の学生

や教員が毎日訪れ、学生がアフリカでの生活や調査テーマについて答える様子は、長崎大学のウェブサイトやインスタグラムでも盛況の様子が取り上げられ、多文化社会学部が実践する学びとして紹介された。

12月の１週目から２週目にかけては昨年度に引き続き写真展＆ギャラリートーク「ハクナマタタ・ザンジバル」が開催された。附属図書館１階のギャラリー・スペースを利用して、写真とアートでザンジバルの風景や学生のフィールドワークの様子を学内外の人々に紹介するイベントとして学生が中心となって写真の選択を行い、展示位置を工夫してザンジバル的な空間を作り上げた。写真展では写真の展示に加え、ザンジバルで収集されたタイルや陶磁器の欠片の展示、学生が主体となって開催されたギャラリートーク、ザンジバルのアート体験コーナーが設けられ、長崎大学内外から来場した人々に海外フィールドワーク実習の活動を紹介する貴重な機会となった。来場者が「ティンガティンガ」や「マサイ・ペインティング」の作成を体験できるコーナーでは、昨年度と今年度の海外フィールドワーク実習履修者、高田と梶原がザンジバルで習得した描画技術を披露し、来場者インストラクターとして活躍した。学生はザンジバルを五感で感じてもらうため、ザンジバルの食文化に親しんだ川床が中心となって来場者に海藻加工品を利用したクッキーを作り配布するなど、イベント内容に工夫を重ねた。ザンジバルの背景知識を持たない来場者に「ザンジバルらしさ」を伝える、という経験を通して、学生達は自らのフィールドワークを見つめなおし言葉にすることができたのではないだろうか。

４．おわりに

以上、長崎大学多文化社会学部の「海外フィールドワーク実習」における CF の参画について私たちの視点から振り返ってきた。CF は教員と学生の間に立って、学生とより近い立場で学習指導をおこなうという独自の教育役割を担い、その成果が期待されてきた。海外フィールドワーク実習において、この学生との独自の「距離間」は指導において時に功を奏し、時に課題の起因ともなったと言える。ここでは、CF として、二年間本科目へ携わって私たちが学んだこと、そして、見えてきた課題について回帰的に述べたい。

上述の年間を通したキャンパス内外での授業活動を通じて、CF は学生との心理的距離を縮めることを目指しながら、彼らの学びにおいて信頼関係を構築することができたと自負している。学生は一年次後期に「フィールドワーク基礎実習」科目でフィールド調査を企画・実施した経験があるとはいえ、本科目の履修まで

の一年のブランク期間に加えて、舞台を見知らぬ海外へと移して調査をおこなうことは、かれらに負担であったようである。CF はこの負担を軽減するために入念な授業準備を心がけた。そして、セミナーでともに時間を過ごすうちに、学生は当初の緊張がほぐれ、徐々に CF へ心を開いていく様子が感じられた。彼らはメールで些細な質問をおこなうようになり、あるいは学習相談のためにオフィスにも足を運ぶようになった。特筆すべきは、実習後の CF－学生間の距離の縮まり方である。3 週間にわたりザンジバルで寝食を共にした生活は互いを知る機会となり、実習後は、私たちの間で授業の枠組みを超えた関係性が樹立された。このことは指導面にもプラスの効果をもたらせたと考える。たとえば、ポストフィールドワーク・セミナーでのデータ分析や執筆について議論した際、CF は各学生の性格を念頭に置きながら個々の指導にあたることができた。やる気が削がれている学生や進捗が滞る学生がいれば、適切なアドバイスや励ましを CF 間で熟慮し、当該学生とそれらを共有した。このように、学生が近しい存在として認知する CF という独自の立場から、かれらのフィールドワークの学びに関われたことは喜びである。

その一方で、CF と学生のこの「距離間」は学生指導における難しさを感じさせる要因でもあった。CF が苦心したのは、関係の近さゆえの弛みから生じていると考えられる、学生の気の緩みである。たとえば、このことは課題提出やセミナーの出席率などにおいてとくに顕著であった。CF の側で課題の提出期限や返信期限を設けたものの、これらに期日内で対応する学生の数は限られていた。場合によっては、授業開始数分前に発表原稿を提出する学生もいた。小さなことのように思えるが、このことはセミナーの進行のしかた（ピアレビュー原稿の未印刷や未読）あるいは他の学生の心理状況にネガティブな影響を及ぼしたといえる。また、受講生全員で構築していくはずのセミナーではあったが、自身の発表日以外にはアルバイトなどの事情により、セミナーを欠席する学生も目についた。学生にとって近しい存在の CF ではあるが、これから社会へ飛び立ちゆく学生のことを思い、時に優しく、しかし時に厳格に学生を指導していくことは今後の教育課題であり続ける。

関係の「近さ」ゆえに生じた課題は学生指導の面でも見られた。調査企画、フィールド調査、あるいは執筆で苦慮している学生を指導していると、「助けたい」という思いから、かれらの調査をこちらのレールに敷きたくなる感覚に陥る。しかし、このような感覚で指導をおこなえば、学生の「やりたい事」に耳を傾けるよりは、むしろ、こちらの「やってほしい事」に傾注し、それを押し売りしてしまっているという可能性は否めない。セミナー中に学生の声に充分に耳を傾けられず、

後になってその学生がやりたかったことを知らされたことが数度あった。互いに近しい関係ゆえに声掛けしやすい環境にはあるが、学生が考えていることをかれらの目線に立って考えて、議論しながらその方向性を一緒に探っていくことの大切さ、また、CF の器量・技量と包容力がその指導に求められることを実感した。

ともあれ二年間私たちの立場で「海外フィールドワーク実習」の指導にあたる中で、フィールド調査の醍醐味を学んだのは他ならぬ私たちであった。学生たちとともにザンジバルについて語り合い、現地調査に飛び出し、報告書の執筆に挑戦する過程で、私たちは多くの驚きに遭遇した。素朴であるが核心をついた質問、汲めども尽きないフィールドでの好奇心、積極性、発想力、そしてバイタリティー。教育とは一方的におこなわれるのではなく、相互作用を通じて効果を幾重にも発揮していけるものであると気づかされた。

最後に平成27（2015）年度より「海外フィールドワーク実習」でご指導いただいた科目責任者である増田研先生、波佐間逸博先生、鈴木英明先生にこの場を借りてお礼を申し上げます。